

## 『相良氏法度』の研究（二）

……「スツパ・ラツパ」考……

安野真幸

はじめに

この小論は『相良氏法度』の中の《晴広法》二一カ条について分析を試みたものである<sup>1</sup>。

この《晴広法》の中には「付」の付いた条文が二カ条、「但」が三カ条、「又」が一カ条ある。これらもそれぞれ独立した一法令とみなせば、《晴広法》は全部で二七カ条と数えることもできる。《晴広法》の分析には、この二一カ条または二七カ条をどのようにグルーピングして行くかが問題となろう。瞥見したところ、第三二条・第三三条・第三四条の三カ条は「下人・野盜」を、第三五条・第三六条・第三七条のそれは「一向衆」をそれぞれ問題としており、これらを一つのグループとみなすことができる。

ところで《晴広法》には《為統法》《長每法》と異なり、「〇〇之時」という文言を持つ法令が第二二条から第二八条まで連続して七カ条あり、これらはいずれも公権力の行使に関係したものである。さらにその七カ条の中には「検断俣たるべし」の文言を持つ法令が、第二五条から第二八条までと連続して四カ条あり、これらは軍事・警察権とい

う武家固有の職務である「検断権」に関係しているのである。また、最初の第二一条と次の第二二条とは内容的に密接なつながりが認められる。

一方、残りの第二九条から第四一条までの十三カ条は、相良氏領内の犯罪の種々相を具体的に記したもので、相良氏がこうした犯罪に対して、全面的な対決を挑んでいることは明白である。それゆえ以上述べてきた外形的な特徴や法令の内容から、《晴広法》を大ざっぱにA・「第二一条から第二八条まで」と、B・「それ以降」の二つに分けることができよう。Aはすべて公権力の行使に関係している法で、これを今、仮に「行政法」と名付けるとすれば、Bは「刑事法」と言うことができよう。

Bの「刑事法」は、相良氏が検断権を軸に公権力として成長を遂げてきたことと密接な関係があろう。相良氏が社会の秩序維持者として排除すべき犯罪を明示したことは、《長每法》のように領内に想定される紛争に対して相良氏が第三者として登場し、紛争解決のための裁判の円滑化を計ろうとしたものとは明らかに次元を異にしている。副題を「スッパ・ラッパ考」としたのは、Bの第二九条以降を折口信夫のいう「スッパ・ラッパ」にかゝわるものと理解することができ、多少なりとも折口の議論を発展させることができると思ったからである。

以上のようなA・Bの特徴を踏まえ、まず第1章では「井手溝」の言葉を含む第二一条・第二二条・第四〇条とそれに関連の強い第二三条・第四一条を「公共の利益」にかゝわるものとして一まとめとし、第2章では第二四条から第二八条までを「検断権」を行使する際問題となる「犯罪者の財産の処分」について定めた法令として取り上げることとする。第3章では第二九条・第三〇条・第三一条と第三八条を取り上げ、これらの法令の背後に「人買い稼業・人入れ稼業」の存在を考えてみたい。

さらにここからB全体が「スッパ・ラッパ」に対する法令である可能性が生まれてくるので、以下このことを軸に

検討を加えていきたい。第4章では第三一条から第三四条までを「下人・野盜」を問題としたものとして取り上げる。第5章では「ラッパ」の親分が近世に至り、人入れ稼業を行うとの折口の議論を踏まえ、「スッパ・ラッパ」と武士社会の底辺とのつながりを検討する。第6章は第三五条・第三六条・第三七条の「一向衆」制禁の問題を取り上げる。第7章では主に第三九条から「山伏・行人」を考えることとしたい。

## 1 公共の利益の擁護

ここでは、最初の第二一条とそれに関連する第二二条・第二三条および第四〇条・第四一条の計五法令を取り上げ、分析を試みたい。

第二一条の「井手溝奔走題目候」は事書に当り、この部分は「井手溝などの用水路を築造・修理する際の労働力提供の問題について」と現代語訳できよう。また本文の方は「田数に応じて何度も人数を出すべきである。労働力を提供しない方の水口はすべて閉ざすべきである」となろう。中世における用水路の建設・維持・管理の主体には、荘園領主・村落共同体等々が一般に考えられているが、ここでは甲斐の武田信玄が「信玄堤」を築いたのと同様、戦国大名である相良氏がその主体となっているのである。

用水路建設は個別領主の力ではできないので、彼らを越えた大きな力が必要であつたと考えられているのに、ここでは、その主体として領主たちの共同体である「公界」が登場せず、この法令を見る限り、人々を公共事業に動員し治水事業に当たったのは相良氏自身であり、大名の相良氏が「公界」の仕事を行行しているのである。それゆえこの法令は、一面では相良氏が「公界」との協力関係を前提としつつ、相良氏権力Ⅱ「公儀」が領内における唯一の「公」

であると宣言したものとなろう。

相良氏の「公儀」が「公界」が本来主張すべきことを代弁している点に限れば、『晴広法』には『為統法』『長每法』との連続性を認めることができよう。例えば「刈跡放牧」を定めた『長每法』第一〇条は、田畑の耕地から牛馬放牧地への切替え時期を定めたもので、『日本常民生活絵引』には、耕作の終わった耕地を共同利用地として放牧地とする慣行は各地に見られたとある。また戸田芳実・河音能平は、耕作時には田の端に「しめ」を下しておくが、はずすと放牧地となるという中世初期の慣行を明らかにした。

当時の相良氏の領国内において、「しめ」を下ろす慣行があったか否かはわからないが、この法令は耕地を決められた時期に一齐に放牧地とするよう定めたもので、逆にいえば、「刈跡」に裏作の「麦」を植えて「二毛作」をすることを禁じたものである。本来こうした耕作強制の主体は農業共同体であろう。この時期まだ村落共同体が成立していないとすれば、領主たちの共同体Ⅱ「公界」の仕事であつたはずである。それゆえ相良氏はここでも「公界」の仕事を代行しているわけである。

近世になると、球磨川の本流から直接水を引き人吉盆地の南の地域を広くカバーする大規模な用水路「百太郎藩・幸野溝」が、前者は百姓たちによって、後者は人吉藩、中でも藩士高橋政重によって作られたという。また既に見たように、『長每法』の第八条では個別領主の行う小規模な新田開発を問題としていた。それゆえこの『晴広法』の段階の治水灌漑工事は、球磨川の本流ではなく、その支流から水を引く灌漑用水路の建設であつたと想像される。

次の第二二条「買地の事」は、土地が売買された場合の用水路に対する労働力提供の義務を、具体的な数値を挙げで定めたもので、内容面でも第二一条に引き続いている。この法令は「買地について。用水路の労働力提供が十人なら、買主・売主より五人づつ出すべきである」と現代語訳できよう。また次の第二三条「田銭の事」は段銭に関する

定めて、「段銭の御触れが出たときは、五日以内に揃えて出すべきである。付、買地の場合は、買主・売主がそれぞれ半分づつ出すべきである」となろう。

第二条と第三条の「付」では、共に用水路の築造・修理や段銭の賦課などの「公への負担」は「かひ主・うり主半分づつ」とあり、土地を売却しても売主の土地への義務が消滅しないとする点に注目すべきである。ここから校注者・勝俣鎮夫は、これらの「買地」は《為統法》の「買免」の場合と同様、年季明戻特約の本銭返・年季売などの売買としている。また第一条と第二条との関係は、第三条とその「付」との関係と同様で、第一条が本条で、第二条はその付則と考えられる。

以上をまとめると、第一条から第三条までの三法令は相良氏が「公」の立場に立ち、公権力の発動として①・人々を公共事業に動員したり、②・段銭を徴収したりする際に、領民の側が守るべき掟・義務を定めたものとなる。一方「井手溝」に関連する法令はBの第四〇条「井手溝の古杭・樋を取る事」にもあり、これは「用水路の古い杭・樋をとる者は罪科に処せられるべきである」となる。この法令は「井手溝」を破壊する行為を農耕的共同社会の秩序維持の立場から厳しく禁止したもので、古代の「天津罪」との関連さえ考えられる。

第四条「さし杉竹木切る事」であるが、「さし杉」は「栗」の枕詞であることから、「さし杉＝栗」とすると、この法令は「栗やその他の有用な竹木を、案内なく勝手に切るものに対しては、見つけ次第主人に断わって成敗すべきである」となる。肥後熊本、中でも球磨郡が現在「栗」の名産地であることから、当時も「栗」の多収産地域と考えられ、当時人々の生活が「栗」などに多く依存していたとすれば、その食料源の保護は、社会の秩序維持のため必要であり、この法令は第四十条とやや共通するものとなる。

以上から、相良氏は自らの任務を農耕的共同社会の秩序維持に置き、公共の利益擁護の立場から「井手溝」や「栗」

の保護を領民一般に強く主張していることは明らかである。また、これらの法の背後に「公儀」と「公界」の協力関係が認められ、《晴広法》には《為統法》《長每法》との連続性が認められよう。しかし後二者と比べ、前者には「公儀」のヘゲモニーが圧倒的に強く表れており、この点にこそ《晴広法》の特徴を認めることもできよう。

## 2 検断権の行使

次の第二四条から第二八条までは、検断権行使の際の具体的な問題情況を示す法令である。「中世においては、犯人の財産・権益は検断を行うものの手中に帰する」ことが原則で、校注者の勝俣鎮夫は、これらの法令は「この原則の下に、犯人の財産・権益の帰属をめぐる、紛争を起す可能性の強いケースを列挙して、規定したものである」と述べ、さらに「おそらく帰属をめぐるこのような詳細な立法を必要とした背景には《私》検断という検断形態が予想される」としている。

しかし服部英雄は、「検断職」は相良氏が直接特定の家臣に対し特権として与えたものとしている。私は、戦国大名の相良氏は、刑事犯の取り締りを軸に公権力として成長を遂げたと考えるので、ここでは服部の見解を支持し、相良氏の検断制度を《私》検断とする勝俣の見方は採らないこととする。《私》検断が存在しなくとも、検断の際、犯人の財産・権益の帰属をめぐり、紛争の起る可能性はいくらかもあり、これをあらかじめ防ぐための規則を明確化することは相良氏にとって必要であったと思われるからである。

まず最初第二四条「検断作子之事」の解釈の問題に入りたい。特にこの法令は難解なので、これを解釈するために「但」以前を原則部、それ以後を例外部と名付け、次の三つを仮定したい。

①・この法令の原則部の「置主」である「主人」は、第三条にある「本作人」と同一であると思われることから、名田には名主と本作人、作子の三者がそれぞれ「名主職・作職・下作職」の権利を持って存在していたこと。

②・伊達『塵芥集』第一五一条には「科人の在所成敗のとき……作毛の事は、代官衆（＝検断役人）一向競望あるべからず。地頭の俣たるべき也」とあることから、例外部の「公役」の徴収権は地頭にあったと思われること。

③・名主が犯人として摘発を受けた際、本作人の側が名主に関連して不利益を受けることがないよう主張し、検断役人や公役の徴収に携わる地頭との間で問答が生じたこと。

以上のような事態を想定することで、この法令を次のように現代語訳してもよいのではなからうか。

検断の行われる名田に、本作人が作子を置いている場合。（犯人として摘発された名主と作子との間には何のつながりもないのだから）作子は主人である本作人に返すべきである。但し、その年の収穫物を刈り取った場合は、その年に限り、本作人は公役を支払うべきである。また、名主のみならず置主の本作人も同時に犯人として摘発された場合は、公役は置主の主人に付けられるべきである。

以上の解釈から、原則部では「主人である本作人」の利益が認められているが、例外部では「公役」を徴収する地頭側の利益が擁護されていることになる。例外部の収穫物の刈り取りがまだの場合、「公役」や「本作人・作子」の取り分がすべて検断側に没収されたのか否か、ここからでは明らかでないが、おそらくは第二四条―第二八条までの五法令が存在すること自体、検断の場における権利関係の明確化を目指したものであり、検断役人の競望は否定され、権利関係は明確であったと思われる。

第二五条「検断縁者之事」は、「縁者」が検断の対象となり、検断役人に没収されるのか否かを問題としており、「従他領、我々兼日格護候が、帰りに来候」は犯人側の言い分で、次の「是は……候由」までは、その言い分に対する法制定者である相良氏側の解釈・判断と理解したい。とすると、現代語訳は次のようになろう。

検断の行われる屋敷内に、犯人側が縁者を格護している場合、「確かに以前は我々が格護していましたが、たった今他領より帰ってきたばかりです。(連れていかないで下さい。)」などと言うことがある。この言い分を認めると、犯罪の摘発されるより以前に、彼者(Ⅱ縁者)をそちらの方(Ⅱ他領)へずっと置かせてもらっていたということになる。他領の人の言うことと照合しない場合は、検断の対象となり、検断を行うものの手中に帰すべきである。

第二六条「検断縁約之娘の事」は次のようになろう。

検断のとき、兼ねてより先方へ縁約がある娘なのに、嫁に迎えていない場合は、検断の対象となる。しかし、その時になって娘を請取る場合は、請取った婿を科とする。

第二七条「百姓検断之事」の現代語訳は、次のようになろう。なお「殿原に仕候」は、犯人である「百姓」側の言い分である。

百姓身分のものに対し検断が行われる際、犯人側が「自分は殿原(Ⅱ地侍層)に仕える身分であるから、検断の



対象とはならない」などと主張することがある。その土地を現実に格護している以上は、土地は百姓のもので、検断の対象となる。

第二八条「懸持検断之事」は次のように現代語訳できよう。この条文の「百姓を飯屋」の部分は、懸持地を所有している犯人側の言い分であろう。この「懸持地」について、勝保は「地頭・領主の居住していない土地」としているが、私は〈領主としての直接経営の対象とならない土地で、得分権のみを対象としたもの〉と考えたい。

地頭・領主の居住していない懸持地を検断するとき、「百姓を飯屋に住まわせている（ので、自分の懸持地だとは言っても、それは名目的なもので、実際は百姓のものであり、没収されることはない。）」などと犯人側が言うことがある。はつきりとその地に百姓が居屋敷を持っていると証明されないならば、検断の対象となる。

### 3 スツパ・ラツパ

《晴広法》のB・第二九条から第四一条までの十三カ条を全体として見たとき、相良氏領内における刑事犯罪の種々相が具体的に記されているという注目すべき事実を発見する。第三九条「付」に登場する「すり取」は町場において集団で「スリ」を行う者。第三三条に登場する「夜討・山立・屋焼」等は、江戸時代には「野盗」と呼ばれたものたちの行う犯罪で、第三五条では漂白の「山伏」等が取締りの対象となっている。こうした点で、このBは「検断権」を問題とした前五カ条と連続していることになる。

まず最初の第二九条「女房とかずし売事」は「寡婦を(女房にするから)と云って関係を持った上で、その女性を売るものは盗人である」と現代語訳できよう。これは、現在の「ヤクザ映画」等でおなじみの「すけこまし・めたらし」という犯罪の口口である。女に結婚しようと言って近づき、関係を持った上で騙して売り払い、またその女の「ひも」になる「ポン引き・ヤクザ」の生き方がここから確認できる。「ヤクザ」を現代語とすれば、こうした騙りの徒は、中世の言葉では狂言に登場する「スッパ」と言うことができる。

ところで人が下人となる下人化の契機として有名なものに謡曲「隅田川」などでおなじみの「かどわかし」がある。小学館『日本語大辞典』の「かどわかし」には、「人を勾引する」を意味する「やまと言葉」で、「誘う」を意味する「かどう」から派生したとある。つまり、下人化には国語学的な観点からも「騙し」の要素を否定できないのである。この「騙し」とは、人と人との誠実関係に対する裏切りであり、ひとたび「騙さ」れて下人になると、二度と原状への回復ができない点で、暴力を本質としているのである。<sup>10)</sup>

また同じ『日本語大辞典』には「スッパ」に次の三つの意味があるとある。(一)盗人、詐欺師、すり、かたり、すつと、すっぱの皮。(二)戦国時代野武士・強盗などから出て間者をつとめた者、忍びの者、らっぱ。(三)邪心、いつわりの心、うそ、またそれらの心を持っている人。」ところで、狂言に登場する「スッパ」は皆(一)の意味のものであり、その多くは田舎人を騙す都の詐欺師で、その狂言には『栗田口・金津・磁石・末広がり・茶壺・仏師・六地藏』などがある。

『金津・仏師・六地藏』の三狂言では、人間が仏像に化けており、「スッパ」はいずれも職人の「仏師」という触れこみで劇中に登場する。『栗田口・末広がり』の「スッパ」は市場の「商人・売手」であり、『茶壺』のそれは街道を活躍の舞台とする「盗人」そのものである。また『磁石』のそれは「人売り稼業」の専門家である。しかしこの『磁

石」の「スッパ」は田舎人を騙して人宿の主人に売り払おうとして、かえって彼よりはるかにしたたかな田舎人に逆襲され、刀まで取り上げられてしまう。

一方、説経節『山椒太夫』に登場する口先三寸で安寿・厨子王の一家を騙して人買い船の船頭に売り払う直江津の「人」を売っての名人「山岡太夫」は、『磁石』やこの第二九条の「スッパ」と同じたぐいの人物であろう。彼ら「スッパ」に共通するものは、彼らが本業の「詐欺・騙り」を成功させるために、芸能民としての素質を大いに利用していることである。それゆえ「スッパ」の定義を広く取れば、〈街道や宿や市を活躍の舞台とし、流通・金融界にかゝわりを持つ職能民〉となる。

西欧経済史家として戦後日本の学界を領導した大塚久雄は、近代資本主義を生み出した産業資本とそれ以前の前期的資本とを区別し、後者の商業資本や金融資本の特徴には、〈詐欺・瞞着の要素がある〉と述べたが、「スッパ」とは流通・金融界にかゝわりを持ちつゝ、こうした詐欺・瞞着のみを生業とする人たちとなろう。本物の商人や仏師の活躍が盛んになると同時に、このような詐欺師や闇の商売を行う「スッパ」の活躍する舞台もまた広がったところに、日本中世という時代があったのだろうか。

ともあれ、第二九条の「スッパ」は「人売り稼業」の専門家である『磁石』の「スッパ」と同様、人身売買の舞台となる「人宿」で仕事をしていたと思われる。また「山岡太夫」は「人宿」の経営者である。一方、次の第三十条「人を養置後、売・質物になす事」は「縁者・親類等々の理由で人々を養置いたのに、後になって売ったり質物にする」とを禁じたもので、取り締りの対象となった「養置主」は、大勢の人々を養い置く必要から当然「宿」の施設を持ち、その宿が同時に人身売買の舞台「人宿」であったと想像される。

それゆえ第二九条と第三〇条とは、人身売買の舞台となる「人宿」を問題としている点で連続しており、第三〇条

もまた「スッパ」関連の法令に数えてよいだろう。ところで折口信夫は『ごろつきの話』の中で、「スッパ」とは「ラッパ・スリ」と同類の「盗人職」で、もともとは「野武士、山伏」などとも同じものである<sup>11</sup>としているが、次の第三三条は「夜討・山立・屋焼」等の犯罪を問題としており、これは当然折口の言う「スッパ・ラッパ」に数えることができる<sup>12</sup>。

折口はまた「スッパ・ラッパ」の中で「より団体的なものが「ラッパ」である」とし、「北条早雲のラッパの利用は有名だが、その専門は傭兵となり諸国の豪族に腕貸しすることにあつた」という。一方平凡社『大百科事典』では「足軽」を「悪党的な傭兵」とし、「スッパ・ラッパ」も忍術との関係で説明しているが、これら足軽や忍者を大名に斡旋した中世の「口入れ屋」のことは、これまで日本史畑では論じられてこなかったと思われるが、「ラッパ」の専門を傭兵とする折口説は大いに参考となろう。

しかし「ラッパ・忍者」とは何かという問題は、アウトローの野武士・強盗と、秩序の中核にいる大名との結び付きの問題なのだから、本来両者の関係は複雑だったと思われ、〈大名側が捕まえた野武士・強盗を殺さない代わりに、妻子を人質に取り、大名のために働かせたもの〉とする説もあり、また折口は「ラッパ」が大名に取り入るのに男色・女色を用いたと<sup>13</sup>しており、さらに「忍者」は被差別民<sup>14</sup>とする見解もある。いずれにせよ、かれらと大名の関係を単純な金銭的な雇用関係と言い切ることは困難である。

一方折口は、〈江戸時代に入ると平和な時代となり戦争がなくなったので、傭兵であつた「ラッパ」は職を失い、「ラッパ」の親分は「人入れ稼業」の「俠客」となり、子分たちを大名の家に売りつけたとある。それゆえ今仮に相良氏の領国内においても、折口の言うとおり「ラッパ」の親分が江戸時代の「人入れ稼業」の「俠客」と同様、表向きは「縁者だ、親類だ」と言つて大勢の子分を養ひ置き、必要なときに豪族に腕貸しに出したり、武士などに売りつけて

いたと仮定してみたい。

とすると、次の第三〇条はそうした「ラッパ」の親分に対する取り締り法令で、「縁者・親類等々の理由で養置いたのに、後になって売ったり質物にすること」を禁じたものとなる。しかし法令の最後には「兼日格護無用候」とあって、法令全体の趣旨は、人を「売ったり質物にすること」よりもむしろ日頃大勢の子分を養い置き、一家を構え、社会的な勢力を築いていることそれ自体を犯罪視し、こうした「ラッパ」の親分の存在自体を禁止・抑圧しようとしていることになる。

一方森田誠一『熊本県の歴史』<sup>16</sup>には、〈江戸後期の寛政元年の人吉町には土蔵九五棟、問屋十七軒があつて繁栄していた〉とあり、後者の内訳を「川舟問屋二、他領川舟問屋四、商品問屋六、日雇問屋二、杣子問屋三」とある。この「日雇問屋二」が今問題としている人入れ稼業の「口入れ屋」に当たり、江戸時代後期であれば、社会的な必要から「人入れ稼業」は認知されていたことになる。それではなぜ戦国期には禁止・抑圧されていたのだろうか。

その理由は、この当時の「ラッパ」の親分の仕事で、「売買・質入れ」形式で行われ、近世の「遊女奉公」の場合と同様、人身売買であつた点にあり、また戦国大名の相良氏は鎌倉幕府と同様、建前上は人身売買を原則として禁止していたからではあるまいか。河音能平・磯貝富士男の明らかにしたように、寛元三年二月十六日の鎌倉幕府法は、飢饉に際しての被養者を次の三つの場合に分け、養育者が被養者を売買や相続の対象にできるか否かを定めている。被養者が(イ)「無縁の非人」の場合は売買・相続の対象となり、(ロ)「親類境界」の場合は対象とはならないが、養育者一代の間はその支配に服すべきものとされ、(ハ)「養子」の場合は奴隷扱いは禁止されていたのである。それゆえ逆に人身売買を専門とする「ラッパ」の親分の方は、御上の目をこまかすために、自分の屋敷内に売買の対象となる人々を一時的に養い置くに際して、(イ)の「無縁の非人」ではなく「親類だ・縁者だ」とする必要があつたことになる。

この解釈が正しいとすれば、第三〇条は「ラッパ」の親分が「人商人」として、人身の「売買・質入れ」を常としていたことを示すものとなり、前条の第二九条の「但」の「質流れに寡婦を取った場合には、その時の事情による」ととする」を加味すれば、彼ら親分衆は金貨業をも営み、借金のかたに取った女を売ることもあったと理解できよう。ここからさらに次の第三一条「売地之事」は、金貨業の親分が土地売買の際「本作人だ」といって売買に介入することを禁じたものとの解釈も可能となつてこよう。

以上から、第二九条・第三〇条・第三一条の三カ条は「スッパ・ラッパ」に対する法令で、第二九条は(一)の意味の「スッパ」、第三〇条は(二)の意味のものとなる。また次の第三二条・第三三条には「雇主・やとれ主」の言葉があり、この二カ条も人入れ稼業と関係があるので、Bは全体として「スッパ・ラッパ」に関する法令である可能性が生まれてくる。今後はこの仮説に基づき考察を続けていきたいのだが、ここでは取り敢えず、第三八条と第三九条の「付」を取り上げ解釈を試みて置きたい。

第三八条の「中媒事」であるが、これは、「夫より紛れのない去条(＝離縁状)を得ていない女子をそこにつに仲介してはならない」と現代語訳できる。これら中媒の仕事は恐らく老女のものであろうが、問題なのは「そこにつに中だち無用」とある「中媒」が、結婚の仲介なのか、売春の斡旋なのかということである。

人妻や娘の密会を禁じた仁治三年の豊後大友氏の『新御成敗状』の「中媒事」を参照すると、後者の可能性が高く、離縁された女の売春は可という判断を含みながら、明白に離縁されたわけでない人妻の売春斡旋を強く禁止したものと成ろう。となると、この法令には町場における遊女屋と、そこで働く中媒の存在が考えられることになり、第二九条の「やもめ女」が売られて行く先も遊女屋と思われることから、この両条は互に関連ある法令となろう。

第三九条「爰元外城町にてなしか之事」は相良領内の町場「外城町」に関する法令だが、その「付」に「くみ候而

すり申候間」とある「すり取」は、町場で「スリ」を行うことで、語源的には「スッパ」と関係があらう。折口は（集団で行動する人たちが仲間から分かれて、単独で行動するようになったのが近世の「スリ」だ）としているが、この場合「袖をひかえ」た者が糾明の対象となっており、集団的な連携プレーが伺われ、「すり取」は集団で行われたことになる。それゆえこの用例からは折口説は成立しないことになる。

#### 4 悪党・野盗と人入れ稼業

ここでは第三二条・第三三条・第三四条の三カ条を取り上げ、分析を試みたい。最初に、第三三条「やとわれて夜討・山立・屋焼之事」を取り上げる。この法令は次のように現代語訳できよう。

夜討・山立・屋焼の犯罪を行い、現行犯として逮捕されたのに、犯人側が「人にやとはれてやったのだから自分には罪はない」と言い張ることがあるが、犯罪の実行者は計画者と同罪で、やとはれ主も首謀者・計画者である雇主と同様に成敗する。ただし、時を移さずただちに仲間を裏切り、返り忠して相良氏に訴え出た場合には、刑のあるなしは、そのときの相良氏の判断によることとし、無罪となる場合もある。

この法令はアウトローである野武士・強盗Ⅱ「ラッパ」に対するものである。この「夜討・山立・屋焼」は鎌倉幕府法にたがたび登場する「夜討・強盗・山賊・海賊」に対応しており、鎌倉時代であればこれらの犯罪者は「悪党」となる。当時「悪党」が数百人と群れをなし、港湾や市場など分業流通の結節点を襲撃目標としたことから、その

背後には金銭を媒介とした雇用関係が想定されているが、ここにある「雇主・やとはれ主」の言葉は、この武装集団における「傭兵」問題を考える糸口となろう。

一方、江戸時代であれば、このような「夜討・山立・屋焼」の徒は「野盗」と呼ばれ、池波正太郎の時代小説『鬼平犯科帳』でおなじみの「火盗改」、正式には「火付盗賊改方」の取り締りの対象であった。このような野盗集団が「何の何某」という二つ名で呼ばれる親分を中心に結束し、「盗人宿」「落宿」を隠れ家・アジトに持ち、盗みに入る目星を付けた大店に子分を奉公人として送り込み、彼らの手引をさせていたことは有名である。今も残る「夜口笛を吹くと泥棒が入る」などのことわざは、こうしたことと関係があろう。

つまり、江戸時代の「口入れ屋」の仕事を公認の「人入れ稼業」とすれば、「野盗」の行うそれは非法法のものとなろう。ここからも、折口の言うとおり、「ラッパ」と「人入れ稼業」の「侠客」と「野盗」の三者の間には隠れたつながりが確認されよう。ところで第三三条の「ラッパ」がアウトローであるのに対して、第三〇条の方の「ラッパ」は、折口の言う近世の「人入れ稼業」の「侠客」や「口入れ屋」に近く、大勢の子分を養う必要から「宿」を持った存在と思われる。

一方、江戸時代の「口入れ屋」は、宿下がりの奉公人のための「小宿・中宿」等の施設を持っていた。また『山椒太夫』に登場する「山岡太夫」は「人宿」の経営者であり、狂言『磁石』や第二九条の「スッパ」は皆、人身売買の舞台となる「人宿」や第三〇条の「人入れ稼業」の「ラッパ」を仕事仲間としていたはずである。つまり「人入れ稼業」や「人売り稼業」の職業と宿泊施設である「宿」とは密接不可分な関係にあり、ここからも折口の言うように、中世の「ラッパ」から近世の「人入れ稼業」の親分へという展開が辿れそうに思われる。

いずれにせよ、ここでは完全なアウトローで、秩序の外にあった第三三条の悪党・野盗としての「ラッパ」と、社



会的な分業体制の中にありながら、相良氏から抑圧を受けている第三〇条の「人入れ稼業」の「ラッパ」とを区別して考えてみたい。とすると、第三三条の背後にはもう一つ別の「ラッパ」が考えられ、第三三条が問題としているのは、悪党や野盗集団に入っただけの新人りの言い草か、「人入れ稼業」の「ラッパ」を通じてヤバイ仕事にかかわりを持った者の場合かのいずれかとなるう。

また同条の「但」以降は、こうした悪党・野盗集団からの離脱、返り忠を定めたものののだが、集団に対する裏切りをまつ以外に対策がなかったほどに、後世の「侠客」集団などと同様、こうした集団は親分を中心とする団結が固かったであろう。以上から「悪党・ラッパ・野盗」などの集団は、流通・金融界に身をさらしている関係上、一面では金銭づくのドライな契約関係の世界に身を置きながら、他方、裏切りなどありえない親分子分という擬制的な血縁関係を組織原則としていたことになる。

それゆえ彼らは常に、金銭関係というドライな契約関係と、親子関係というウエットな身分関係の二つに引き裂かれた存在だったと思われる。折口が彼らの「親分・子分」制度を、〈外部の農村の村落制度から生まれた〉としているのも、このことと関連しよう。なお「雇主・やとはれ主」の言葉は、第三二条「逃亡下人之事」にもあり、連続する二法令は内容的にも関連があらう。実際のところ逃亡下人が「やとはれ」てこうした無頼の集団に加わる場合が多かったと思われる。

なぜなら「人の下人」でありながら自己の身体を主人より盗み、逃亡を企てる人は、「自己の力以外には何にも依存しようとしなない」点で気質的にもこうした集団に近く、むしろアウトローの世界に近親感を抱いたと思われるからである。ともあれ、第三二条は次のように現代語訳できよう。

人の下人でありながら、主人よりその身を盗み、屋敷を出てしまうこと、つまり、逃亡してしまうことがある。それでいて、その逃亡下人が他方より「自分のやったことを今では後悔している」と、伝言などをよこす場合がある。そのときは、主人は当の逃亡下人を受け取りに行き、「やとはれ主」となっている下人だけを折檻すべきである。雇主も盗人と同罪であるとして罪にしようとするのでは、世間は通らない、道理にあわないことである。

ところで、氏家幹人『江戸の少年』<sup>20</sup>によれば、江戸末期、天保年間の旅はオモテの制度とウラの制度の二つからなっており、カタギの者の旅が〈手形・関所・旅籠……〉等の要素からなるオモテの制度に沿っていたとすれば、芸人などの旅は〈添状・目明し・通り者・男だて……〉と、総じて俠客的世界のネットワークを回路としていたとある。それでは、戦国期の九州・肥後・人吉の世界では、この俠客的世界のネットワークの先駆形態はどうだったのだろうか。次にこのことを考えてみたい。

第三五条では漂泊の民である「祝・山伏・物しり」たちに対する宿を禁じているが、彼らの旅の回路が民衆の間に強固にできていたとすれば、それは一向衆が民衆の中にしっかりと根を下ろしていたことになるが、弾圧を受けていた当時、彼らが民衆の家々に宿泊できたとは考えにくい。それゆえ「宿泊」できたのは、多少なりともアジールの・治外法権的な色彩を持ったところのはずである。これまでの分析の結果を踏まえ、思い付くところを挙げると次のようになろう。

- ①・アジール権を持つ「寺社」「市」。
- ②・人身売買の舞台となる「人宿」。
- ③・大勢の子分を養い置いている「ラッパの親分の家」。

④・野武士や野盗の秘密の根拠地である「盗人宿」「落宿」。

⑤・行人たちの根拠地「商人司の屋敷」。(これについては後述)

第三二条に戻ると、逃亡下人たちの逃げ込む先は「邪の道は蛇」で、これら「ラッパの親分の家」や「人宿」等々の可能性が高く、また逃亡下人を新しい主人に紹介したり「雇主」に対して保証人となったのも彼らであったと思われる。また日頃大勢の子分を養い置く「ラッパ」の親分は、江戸時代の目明かしと同様「二足のワラジ」を履き、これら逃亡下人の捕獲の仕事もしていたのではあるまいか。

次の第三四条(欠落人札銭之事)は、逃亡下人を捕まえて返還した場合、下人の主人側が支払うべき札銭の額を定めたもので、札銭の対象になるのは「人入れ稼業」で「二足のワラジ」を履いた「ラッパ」と思われる。相良氏の支配する三郡の中で球磨郡が八代・葦北両郡よりも、札銭が少ないのは、相良氏を媒介として人返しが行われており、逃亡下人を捕まえると、相良氏のいる人吉まで報告することになっており、そのための費用が球磨郡の方がかゝらなかったからであろう。第三四条を現代語訳すると次のようになる。

球磨郡の中で逃亡下人を捕まえた場合の札銭は三百文、八代・葦北で捕らえた場合は互いに札銭五百文、相良氏の領国以外から来たものを捕らえた場合は一貫文とすべきである。

磯貝富士男の明らかにしたところでは、鎌倉後期以降、飢饉でない平常時において良民の家族または本人の流質される際の人身の最低値段は二貫文が相場であったという。それゆえ、捕まえた逃亡下人を転売すれば、最低でも二貫文に売れるところを、同じ相良氏の領国内の逃亡者であれば、一割五分から二割五分の札銭で互いに人返しをするよ

う命じられており、他国からの逃亡者の場合でも、五割の礼錢で本の所有者に返すよう命じられたことになる。

前述の第三二条には「逃亡下人が主人のもとを逃げ出したのを後悔し旧主人に伝言などした場合、旧主人は下人を請け返し、下人だけを成敗すべきで、雇主も科人同然というのは世間では通らない」とある。これは《長每法》第九条の「本主人の領掌」のない「扶持」は無効を原則とすれば、それからの逸脱となろう。逃亡下人が新たに契約した雇用・主従関係には当然「本主人への案内」はなく、相良氏も当然これを容認しないはずで、「やとはれ主」のみ有罪とはならないはずだからである。

それにもかゝらず、相良氏が「やとはれ主」の下人のみを有罪とし、「雇主」の罪は問わないとしたのは、「雇主」を科人とすれば、仲介した「人宿」や「人入れ稼業」の「ラッパ」も当然有罪となるが、相良氏はそれを望まなかったからであろう。つまり相良氏にとって、下人制度の維持の方が、領内のアウトローの世界とつながりを持つ「人宿」を取り締るよりも重大だったと考えられ、相良氏は全領主階級の共通の利益を擁護する立場に立ち、下人の走入りに対して人返しの督励を行い、下人制度を維持する方を選んだことになるのである。

ところで『八代日記』<sup>272</sup>天文二十二年正月十九日の条には次のような注目すべき記事がある。

麦ノ島の田十郎と申候者のためニ、小河ノ清三郎と申候者ハ知人也、彼清三郎下人ヲにかし候ヲ、田十郎ニ頼由ヲ申候、しかる所二十九日市ニ又二郎と申候者、人ヲかくし候てめし置候ヲ、田十郎聞付候てしきりニミるへきよしを申候、又二郎ハしきりニミせましきよし申候、依夫喧嘩いたし候て、さかへ候者ヲハ田十郎かつきころし候、しかれハ其当人ニテ田十郎も則時ニ成敗候、又二郎かくしめしおき候ハ、平馬殿領地小野の者也、又二郎ハ山中させられ候いか、か、かくし候者平馬殿ニ逃入候、

「麦ノ島の田十郎」と「小河ノ清三郎」は共に「二つ名」で呼ばれており、これまで問題としてきた「スッパ・ラッパ」のたぐいと考えたい。二人はグルで、一方は「下人」を逃がし、他方はそれを捕まえる手筈になっていたわけ、捕まえてから売るつもりだったのか、第三四条にある札銭が目当てだったのか、等々が問題となる。前者とすれば、人の下人を騙してわがものとするやり方は、第二九条の場合と変わらないことになる。後者としても、下人は常に騙される対象であることに注目すべきである。

事件は「十九日市」で「又二郎」なる人物が「平馬殿領地小野の者」である逃亡下人を捕まえて隠し置くことで始まった。逃亡下人が「市」に逃げ込んだのか、他所で捕まえた下人を「又二郎」が「市」に監禁したのか、この記録からははっきりしないが、ともあれ、それを聞き付けた田十郎と又二郎との間で「見せろ」「見せない」の口論・喧嘩となり、刃向かった又二郎の手の者を田十郎が突き殺し、現行犯として田十郎もまた即座に成敗されるという展開となった。

最後に「又二郎ハ山中させられ候いか、か、かくし候者平馬殿ニ逃入候」とあるが、「又二郎」と逃亡下人を隠し置いた「かくし候者」の二人は、共に「麦ノ島の田十郎」や「小河ノ清三郎」の縁者からの報復を恐れていたことになる。また、田十郎に突き殺された「又二郎の手の者」やこの「かくし候者」の存在から、「又二郎」もまた複数の子分をもつ「スッパ・ラッパ」のたぐいか、「市」に関係する人物かの可能性もでてくる。後者とする、逃亡下人は「市」に逃げ込み、これを「市」の内部に監禁したと理解できるのである。

## 5 押し借り強盗は武士の習い

折口信夫は『ごろつきの話』の他に『無頼の徒の芸術』<sup>23</sup>においてもまた、「武士」は「野武士・山伏」と同類で、職人の一種だとして、今に残る「押し借り強盗は武士の習い」ということわざを紹介している。一方網野善彦は、東国の在地領主である鎌倉武士に対して〈鎌倉期の西国武士の「下司・公文」などは一種の職能民で、「職人的武士」だ<sup>24</sup>〉としている。それゆえ折口の〈武士〓強盗〉という議論は、網野の〈悪党〓職人的武士〉という議論と近いことになる。

しかし「検断権」を中に置いて考えれば、武士と盗人はその主体と客体、担い手・取り締り側と、その対象・取り締まれる側とに明確に対比され、両者は互いに相対立する関係にある。しかしながら相対立する両者も、もともと互いに密接な関係にあり、本来一つであったものが時代と共に両極に分裂していったと考えられる。以下この問題を、網野善彦・石井進・笠松宏至・勝俣鎮夫四氏の共同著書である『中世の罪と罰』<sup>25</sup>を頼りに考えてみたい。

この本の後半には四者の討論が収められており、石井はここで『日葡辞書』を根拠に、「中世の在地世界において「大犯三箇条」とは「家焼き・人殺し・盗み」の三つをいい、これを犯したものは死刑に処せられた」とし、「謀叛・殺害・大番催促」からなる守護の「大犯三箇条」とは異なる在地の「大犯三箇条」の存在を主張している。今我々の問題とする第三三条の「夜討・山立・屋焼」のうち、前二者は「夜」「山」と時間と場所を限っての「人殺し・盗み」であり、この在地の「大犯三箇条」を言い直したものである。

一方笠松は、収録論文「夜討ち」の中で、『新猿楽記』の「中君の夫は天下第一の武者なり、合戦・夜討・馳射・待射……等の上手なり」を引き、「夜討ち」は「武芸」の一つであったとしている。つまり、殺しや盗みの目的で「夜」他人の屋敷内に「討ち入る」「夜討ち」は、他人の屋敷内への「討ち入り」が重罪である上に、さらに「夜」の犯行

という点で死刑に値する「大犯」であるが、同時に武士の持つべき「武芸」でもあったのである。ここから犯罪者として取り締り担当者の同一性が確認される。

また笠松は討論の中で、〈犯罪現場は危険や機のある場所〉であり、寺社や貴族などの庄園領主は〈家を壊したり人を追っ払ったり〉とマイナスの方でしかこれを罰することはできないのに、「合戦・検断」を「芸能」とする武士は〈犯罪現場に行き、犯人の摘発・追捕をおこない〉、その代償に〈その跡を没収し、その人を殺すなり自分の家人にしたり奴隷にしたり〉とプラスの方で罰することができたと述べている。しかし、この代償の実際は、「大犯」である「殺し・盗み」そのものである。

つまり、殺し盗みを「私」に行うのが「犯罪者」だとすれば、「公」の立場に立ち、犯罪者に対して「摘発・追捕」という名目で殺し盗みを行うのが「武士」となる。戸田芳実<sup>26</sup>は既に〈武士は職業的な殺し屋〉だと述べている。それゆえ「公」の立場を保証する「検断権」とは「盗み・殺し」の別名となる。となれば、「武士」の前身としての「兵」が犯罪者の中から任命されたという『古今著聞集』などの話は、当時の支配者が「毒を以て毒を制す」との判断をもっていたことを示すものであろう。

「武士」強盗の実例として幕末の「天狗党」や鎌倉末期・南北朝期の歴史舞台に登場した異形・バサラの「悪党」を挙げることができる。また『忠臣蔵』で「おかる」の母親が「まさかの時は切り剃ぎするも、武士の習い」と言うのも有名である。古くは『我妻鏡』に畠山重忠の言葉「勇士は武威を募り、人庶の財宝などを奪い取って、世渡りの計とす」があり、これを紹介した五味文彦<sup>27</sup>は、狩猟民出身の武士の行動は常に「狼藉・濫妨」の語と共にあったと述べている。

一方辞書の「山立」には、「狩人」と「山賊」の二つの意味があるとある。人が立てた「狩場」の中に入ったもの

は「盗人」とみなされ、持ち物を没収されたり、身柄を拘束されたりする「狩場法」とでもいえるべき狩猟のルールとの関係で、猟師が山賊に転化する可能性があることを私は既に述べたことがある。また狩の対象を獣から人に変えるだけで、「狩人」はすぐに「山賊」に変身することができたのであるから、狩猟民が「山賊」になる可能性は高かったと思われる。

以上から、狩猟民の中から「兵・武士」が生まれてくると同時に、「検断権」の対象となる「山賊」もまた同じ社会集団から生まれてきたことが確かめられよう。このように「武士」と「盗人」が同一集団からそれぞれ分離して形成されたとすれば、「武士」社会と「盗人」社会を構成する人々が互いに通底しており、「武士」社会の底辺は限りなく「盗人」社会に近かった可能性がある。『忠臣蔵』の劇において、夜の山崎街道で鉄砲を持ち山賊まがいの在り方をしていたのは中間の「官平」であった。

千葉徳爾は著書『たたかいの原像』の中で、天正十四年黒田官兵衛が豊前小倉周辺で薩摩の被官で給地のない「無足人」に属し、「毎夜夜討強盗隙なく」行く「野郎」三千人ばかりを一人も残らずで切りにし、妻子もはた物にあげたとの『川角太閤記』の記事を紹介している。「スツパ・ラッパ」の九州版である彼ら「野郎」は、琉球征服にも使われた人々で、腕力・武力に優れ、倫理・道徳においては一般社会から逸脱し、服装が特徴的であったという。この点は異形・バサラの「悪党」とも共通している。

播磨の悪党について記した『峯相記』には、名誉を重んじ一所懸命に戦う鎌倉武士と異なり、向背常ない傭兵としての悪党の姿が写されており、〈悪党は十人二十人と傭兵となり籠城するかと思えば寄せ手に加わり、敵を引き入れるなど裏切りを旨とし、少しも約束を守る様子はなく、博奕を好み、忍び・小盗を業としている〉とある。ここでは特に金目当に傭兵となった悪党が「忍び・小盗」を業としているとあることに注目したい。



一方、高木昭作は論文「乱世」<sup>30</sup>において、(戦国期の日本の軍隊は敵地における戦闘行動として一般に「刈田・放火・男女乱取」等を行った。戦場における人や物の掠奪は合法とされ、こうした掠奪と兵糧自弁の軍隊の間には不可分の関係があった)等々を明らかにした。それゆえ「ラッパ・野郎」の掠奪行為は、戦国期の貧しい軍隊に一般的である可能性があり、また南九州の薩摩と相良の軍制には共通面が想像されることから、「野郎」と同様なものを相良氏が抱えていた可能性は大きいのである。

『結城氏新法度』第二七条は、「忍者・ラッパ」に当たる「草・夜業」についての法令である。文中に虫食いがあり正確にはわからない点もあるが、結城氏が「若き近臣之者共」に「事を云い付け」たところ、彼らは「表向きはすどきふりを立て」たように振る舞いながら「内々は」別で、云い付けとは別に「女の一人も」掠奪しようと敵地に出かけたと記されている。ここから「草・夜業」という専門家の存在と共に、結城の若き近臣之者共がそれをまねて敵地に掠奪に出かけていたことが伺われる。

豊臣政権による朝鮮侵略の戦場での大掛かりな「人の掠奪」は有名であるが、藤木久志は「戦場の奴隷狩り・奴隷売買」<sup>31</sup>において、戦場における奴隷狩り・奴隷市場・身代の買戻しなどの習俗は、むしろ日本国内に広く見られたものであり、朝鮮侵略下の奴隷狩りはその習俗の持出しにすぎないことを明らかにした。これらを記録したものは、「人の掠奪」は雑兵たちの仕業として、藤木は大名正規軍とは異質な、金目当ての傭兵的な兵士たちの仕業と想像している。

次に『相良氏法度』第三三条の「但」の「時宜に寄るべきか」に注目したい。佐藤進一<sup>32</sup>が述べるように、この「時宜」が「当主の判断」を意味しているとすれば、この場合は相良氏の判断となり、ここから「夜討・山立・屋焼」等を行う「ラッパ」と相良氏の直接的な結び付きが伺われるのである。つまりこの法令の背景には、一時的にせよ相良

氏が「ラッパ」を利用したとか、「ラッパ」集団から抜ける人を相良氏が特別に召し使おうとしたことなどがあつたと見てよいのではあるまいか。

第三三条から、「ラッパ」集団が一面では金銭を仲介とした雇用関係に基づいていることが明らかとなった。一方、江戸時代の武士社会の底辺を形成した武家奉公人が、金目当ての一種の「傭兵」で、「口入れ屋」を媒介とする雇用関係によっており、折口はこの雇用関係の内実を「人入れ稼業」の親分が子分たちを各大名家に売り付けたものとしたことは有名である。ここから、戦国相良氏の武士社会の底辺もまた、金銭を仲介として雇用了「ラッパ」集団によって構成されていた可能性がある。

高木昭作の近世初期の武家奉公人に関する研究<sup>33</sup>によれば、江戸幕府は慶長一四年から寛文元年まで五十年以上の間たびたび「一季居の禁令」を出しているが、これは武家奉公人やその牢人たちが一味徒党する「かぶき者」取り締まり令と相通じたもので、「一季居の牢人」に対する禁令である。またこれまで「身分法令」として理解されてきた秀吉の天正十九年の法令も、牢人中の武家奉公人の取り締まり令であるとした。当局者が彼等を取り締まりの対象とした理由を考えれば、武士社会の底辺Ⅱ「ラッパ」となるう。

それゆえ《晴広法》は、領内の犯罪者集団「スッパ・ラッパ」に対する取り締り立法であると同時に、相良氏の軍隊の編成原理、軍律にも密接にかかわる法令となる。相良氏は戦時の敵地においてのみ許され、「味方の地」においては決して許されなかった「刈田・放火・男女乱取」等々の「濫妨・狼藉」を、平時の領内において禁止しようとしており、戦時に外敵に対して行うのと同様の軍事行動を、平時に領内の犯罪者集団である「スッパ・ラッパ」に対して行おうとしているのである。

このことは、一方では相良氏が領内のすべての軍事行動を独占し、他の一切の勢力の軍事行動を認めないという点

で、領内の軍事的統一ということができるが、他方では、相良氏が相良領全体を一つの陣営とし、その陣営内に平和を命じ、その平和に敵対して「人かどい」や「夜討・山立・屋焼」などを行う「スッパ・ラッパ」等々の犯罪者集団に対しては、全面的な対決を挑んでいると見ることもできる。それゆえ相良氏は、ここに至ってみずからの半身との決別を試みていることになるのである。

このことは相良氏がヨーロッパの絶対主義王権と同様、流血裁判権を意味する「検断権」を軸に公権力として成長を遂げたことと密接な関係がある。相良氏は領国を一つの「平和団体」とし、「領国の平和」を命じたことになり、相良氏は近世の武家政権と同様、支配者集団としての純化をとげようとしているのである。

## 6 「一向衆と「山の民」

ここでは第三五条・第三六条・第三七条の三カ条を取り上げ、これらの法令が共通して問題としている「一向衆」を考察したい。

折口信夫によると（自己の力以外には依存するものを持たない「無頼の徒」の中で、武力を旨とする集団と宗教を旨とする集団とが、中世のころ相互に混同しつつも少しずつ分かれて行った。前者を野武士とすれば、後者は山伏である」という。第三五条の「祝・物しり」は漂白の巫女や祈祷師や占い師をいうことから、「祝・山伏・物しり」が後者に当たろう。第三五条では、他領から来た彼らは「一向衆の基」となるので「宿を貸す」ことを禁じ、第三五条・第三七条では「祈念」等の活動を禁じている。

また第三六条の「一向衆之事」は、「加賀の国が一向衆の支配するところとなったので、神が怒り白山が爆発した

ことは、肥後・人吉にまでこと細かに伝えられており、明らかである」を理由にして、「一向衆」の領内立入を強く禁止したものである。一方折口は、先に続けて「もともと山野を生活の場とする『無頼の徒』のものの考え方は独特で、情念のおもむくままに意気に感じ気分に従って生き、そのためには生命を失うことも辞さない風であった」と述べている。

一向衆徒の場合、彼らの「情念・気分」が阿弥陀仏への信仰によって方向付けられている点で、折口の言う「ころつき」とは異なるが、両者共にともとは「山の民」で、信仰のためには生命を失うことも辞さずとするなど共通点もある。また惣村Ⅱ一向一揆論、農民一元論を批判した井上鋭夫によれば、そもそも「一向一揆」とは、惣村の農民を中心としたものではなく、「ワタリ・タイシなどの非農業民の『山の民・川の民』と結び付いている」という。

一方千葉徳爾は論文「山の生活」<sup>35</sup>において、山での生活は万能の技倆を必要としたことから「山の民」を「技能者集団」とよび、また狩猟專業生活を維持するためには交換・交易が不可欠であることから、「山の民」は商品経済との密接なか、わりを持ち、行商をもしていたとして、平家の落人集落として名高い肥後の五家荘の住人が、熊胆や薬草などを博多・小倉方面に行商して売り捌き、世間師として活躍していた事実を『太宰管内志』（一八〇四―四一年）から明らかにした。それゆえ第三六条で「一向衆」として危険視され、取り締りの対象とされた「祈念・医師」が五家荘などの「葉売り」である可能性は否定できず、「一向衆の基」として領内立入り禁止の対象になったものたちが、「山の民」である可能性は大きいのである。

一方宮本常一は「九州山中の落人村」<sup>36</sup>を調査する中で、中世であれば「山の民」は「平野地方の戦争にも出稼ぎのようなつもりで出て」いっただろうと想像しつつ、彼らの「血は荒々しく、その気性は激しく、たえず争いを繰返しつつ、次第に去勢させられていった」としている。スイス人雇兵やグルカ兵などを挙げるまでもなく、取り立ててこ

れといった産業もない貧しい山村にとって、雇兵は一つの産業であったと思われる。こうした文脈の中に忍者の郷としての伊賀や甲賀を位置付けることができる。

以上、千葉や宮本の民俗学上の研究が明らかにしたことは、「山の民」と「都の詐欺師」とでは空間的にも気質などの面でも大きく隔たっているが、「山の民」が傭兵や商人、「スッパ・ラッパ」と深い関係にありそうだということである。以下において、この見通しを証明して行きたい。

相良氏は近世に至り人吉藩となった後も長く、隣の薩摩藩と共に「一向衆」を禁止しており、享保九年相良氏法度四条の付たりには、「一向宗の事、当家代々にこれを禁止す」とある。人吉藩下級藩士十四人の川辺川の尾曲淵での殉教譚や親子五代にわたり殉教した毛坊主「山田伝助」の話は有名である。また、一九三五年から丸一年間、人吉盆地の多良木と免田の中間にある須恵村に住み着き、現地調査をしたアメリカの社会人類学者エンブリー夫妻の研究報告書『日本の村 須恵村』<sup>39</sup>によれば、仏教のうち「球摩地方でもっとも普及しているのは真宗である」として、次のように述べている。

封建時代には禅宗びいきの相良家によって真宗派は禁止された。禅寺が数多く建てられたが、しかし真宗は決して亡びなかった。熊本から五ツ木の山々を越えて、真宗の僧侶は裏道を抜けて球摩地方に入り、信者の秘密会合が催されたが、須恵村には今もなおその時の農家がある。信者たちは家の壁の内側に阿弥陀をかくし、朝夕これを礼拝した。表面上は真宗は相良氏の時代には消滅したが、明治維新になってその相良氏の勢力がなくなると、真宗は以前より一層再興した。

一方原口虎雄は「薩藩町方の研究」<sup>46</sup>で、薩摩藩の「士族のうち城下士や上級士は神道を今日も守り、下級郷士には一向衆信者が多い。これは藩政期以来のもので、隠れ信仰であった」と述べ、藩の「一向衆」禁止が民衆ではなく、下級郷士対策であったことを明らかにした。

武士社会の底辺が「ラッパ・スッパ」と同一階層によって形成されていたとすれば、彼らこそが「一向衆」の信仰が大衆化する際に、民衆の側にあつて信仰の中心的な担い手となった社会集団、つまり、信仰の共鳴盤であり、島津氏や相良氏にとって「一向衆」対策は「スッパ・ラッパ」対策と軌を一にするものであつたとなろう。事実、三河の一向一揆が徳川家臣団を二つに割って争われたことは、「一向一揆」の構成員と武士社会の構成員との重なりを示しており、武士と強盗との分離の試みは、同時に武士と一向衆との分離の問題たりえたのである。

江戸時代の武家奉公人が「山伏」や「勧進」になろうとの志向性を持っていたことは、次の元和元年の奉公人の出替りに関する定めから明らかである。戦国期の武士社会の底辺を形成していた社会層と「スッパ・ラッパ」の区別はできないし、「スッパ・ラッパ」は江戸時代に入ると武家奉公人になってゆくとすれば、この史料から、折口の言うとおり「スッパ・ラッパ」や武家奉公人という「武力を旨とする集団」が「宗教を旨とする集団」と本来的に近いものであつたことが確かめられよう。

一下々奉公人、年季者格別、一季とハ二月・八月、一年二両度出替申候事せわしきやうに候間、近比より二月二日に  
出替定候、是は在々ハ二月耕作の用意申に付而、三月はもはや耕作の用意おそなわり申候間、二月二極、相済不申  
候へは、三月ハ引込、耕作仕付可申ため也と被仰出、然るに下々奉公人共数多令浪人、在郷へ参もいや、奉公も六  
ヶ敷存引込、即山伏等の弟子となり、祈祷も卜筮も不存、伊勢之祭文一ツ愛宕之祭文一ツいつれなりとも習候而勸

進いたし、身命をすき、或又伊勢熊野の勸進比丘尼を妻女に持、弟子を置、彼等に勸進いたさせ、授無程峯に入、先達と号、金蘭之袈裟をかけ院号を付、諸人に慮外を仕、以之外之曲事之由被仰出、依之下々之中間もすくなく候間、御法度ニ被仰出、

「無頼の徒」である「スツパ・ラッパ」は、先に定義したように、〈街道・宿・市などを活動の舞台とし、金融・流通界にかゝわりを持つ職能民〉という側面を持っていたのである。それゆえ彼らの前身は、網野善彦が精力的に明らかにしてきた鎌倉後期・南北朝期の「悪党」や「神人・供御人・山僧・悪僧」等々となろう。網野は、これら職能民は本来「聖なる世界」に属していたが、南北朝を境に「ケガレ」という宗教意識からする「賤視」の対象となったとしている。

この「聖なるもの」から「被差別・被賤視」へという網野の議論の中で注目すべきは、網野が『一遍聖絵』の詞書の中から見つけた「悪党」と一遍上人との結び付きである。一遍上人に帰依した悪党たちは高札を立てて、一遍が美濃と尾張を遍歴・遊行して布教する場合には、けっして煩いをなしてはならない旨の宣言をし、実際三年間のあいだ「山賊」や「海賊」の妨げに全くあわなかったとある。これは折口の言う「武力を旨とする集団と宗教を旨とする集団とが互いに混同していた」ことの一例である。

それゆえ折口説を考える上で、この網野の紹介した一遍と悪党との結び付きは大切であり、網野説前半の「神人・供御人・山僧・悪僧」等が「聖なる世界」に属していたとする部分は、折口説と共通している。しかし後半部分は多少異なり、網野の議論には「武力を旨とする無頼集団」という視角が抜け落ちている。網野は鎌倉末・南北朝期の「悪党」を問題とした割には、その後は行儀のよい「職人」にスポットを当て、室町以降、戦国期や近世の「悪党」の間

題にはあまり関心を注いではない。

ところで「一向一揆」の中心は「寺内町」であり、その住人に商工業者を多く数えることができることから、商業者こそが「一向一揆」の主な担手だとすることもできる。それゆえ次に「スッパ・ラッパ」と兵商未分離、兵工未分離の問題を考えておきたい。佐藤進一は『南北朝の動乱』において、建武の新政の謳歌した「三木一草」のうちの楠木正成と名和長年を（広い行動半径をもち商業活動に基礎をおいた武士）としている。またこれをうけて綱野が（悪党＝職人的武士）論を唱えたことは既に述べた。

一方、豊田武は（武家の中間小者の輩が内職に営む宿屋も少なくなかった）として、山科言継が永禄十二年頃泊まった宿には、信長の馬廻り大脇伝内の経営する岐阜城下の「塩屋」があり、その他、池田の被官三郎右衛門の経営する観音寺城の城下石寺の宿、六角の中間が営む近江前郷の宿の存在を挙げている。当時の用例として城下町を一般に「宿」と呼ぶが、これは城下町が形成された当時、武士が本領と城下の二重生活を余儀なくさせられていたことによつていえると思われる。

それゆえ城下の武家屋敷は同時に「宿」であり、武家屋敷をあずかる中間小者が宿屋の経営者であつたとしても、少しも不思議はないのである。豊田はこの旅宿業者を特殊な商人に数えているが、兵商未分離の一例に数えてよいであろう。さらに『今川かな目録追加』第七条には「他国之者、当座宿をかりたるとして、被官の由申事、太曲事也」とあり、宿主と寄宿者の間には主従関係が形成されることもあつたのだから、宿屋を経営する中間小者と第三〇条の「ラッパ」との距離はほとんどないことになる。

また『結城氏新法度』第八一条では、家中の武士の販売行為や武家屋敷での商売を禁じており、ここから逆に戦国期結城氏の世界において兵商未分離の在り方が確かめられるのである。石井進は『中世武士団』<sup>45</sup>の中で、海の武士団Ⅱ



松浦党の青方氏の本拠地、長崎県五島列島の中通島を訪れた際、郷土史研究家谷村正行が「鍛冶・大工・船大工・桶屋・紺屋など《五職》とよばれる職人は、殿様にはかならずついていなければならないもので、青方氏の《五職》は……どれも家臣のなかで地位の高い家である」と語ったことを採り上げ、中世の史料で直接裏づけることはできなかったとはしながらも、注目すべき事実としている。

高木昭作は秀吉のいわゆる「身分法令」を再検討する中で、「若党」以下の武家奉公人たちが「奉公をも不仕、田畑もつくらざる」浪人になると、商売人・諸職人に紛れる存在とみなされる事実を明らかにし、天正十八年極月五日付けの「太閤秀吉公ノ御代触状之事」の史料を紹介している。その第二条・第三条には次のようにある。なお、ここにある「侍」とは高木が明らかにしたように武家奉公人の中でも最上位に立つ「若党」のことである。

一 主をも不持、田畑つくらざる侍、可被相払事、

一 諸職人并商売人、此以前仕来候ハバ、可為其分、此触之後、彼主をもたず、田畑不作侍共、職人・商売仕候と申候共、地下可被相払事、

つまり、第二条では武家奉公人で牢人中のものは、①「新たに主人を持つか」、または②「帰農して田畑を作るか」のいずれか一つを選ぶべきであり、そのどちらでもないものは「村から追放せよ」とし、第三条では彼らが「職人・商売人である」と述べても、村から追放せよとして、彼らが③「職人・商売人になる」という選択肢を奪っているのである。この第三条の存在から、武家社会の底辺「スッパ・ラッパ」の世界は、もともと「半工半商」の世界と深いつながりがあったことがわかる。

また近世の人吉藩とよく似た社会構造をしていたものに、隣の薩摩藩がある。両藩は先に述べたように共に「一向衆」を禁じており、また兵農分離の原則にもかかわらず、大量の下級藩士を「郷士」の形態で抱えている点でも共通している。天保期の薩摩藩を取り扱った原口虎雄の研究<sup>8</sup>には、兵商未分離または兵工未分離を示す興味深い事実が次のA・B・Cと三つあるのでこれを紹介したい。

A 城下士の中でも軽輩は、近在で作職自活するか、または家内工業をやって糊口をしのごか、はなはだしきに至っては、当時賤業とされた商職をひそかに行行って自活しなければならぬものが、幕末漸く多きを占めるようになり、……武士の内職としては、金助マリや草牟田櫛や竹笠などの細工を下請けしたり、あるいは夜ひそかに覆面して売り歩くなどは別として、許し難いのは、城下の諸屋敷に名子・下人をおき、窓や藪を開いて店の様にして売物を出す者が多く出るようになったことである。

B 城下士の町人化と同様に注意してよいのは、上級士の家来の出稼である。かれらは主家領地の作職によっても生活したが、中には諸外城に「中宿者」として出稼する者もあった。あるいは工を、あるいは商をもつて生業とした。C 外城郷士にして商業および工業を営む者も多少あったようである。鹿屋郷の野田家が質屋を営んだり、始良郷の森田家が酒屋を営んだときはその好例である。もちろん半工半商ともいうべき、鍛冶屋や紺屋は士族の営業として諸外城にあり、なかんずく加世田の鍛冶は有名であった。

原口は「城下屋敷の町場成および武士の商人化の傾向は、時代が進むにしたがって止み難い趨勢で」あったとしている。Aの「武家の内職」は幕末の諸藩の「職産興業」と共によく知られている。またCでは「郷士」が「質屋・酒

屋・鍛冶屋・紺屋」を営んだとあり、一般に幕末・維新期の政局に豪農・豪商化した郷土が活躍したことも有名である。しかしCはむしろ、武家社会の底辺が本来「半工半商」の世界とつながりがあったことを示している。

なお、郷土については「郷土は作職の外に、医・大工・鍛冶・紙漉・紺屋・石工を営むが、商業を営むのは賤しき業とされた」とある。在郷する郷土が「作職」を持ち農業することは当然であろう。もちろん天保期の薩摩藩のあり方から、直ちに戦国期の相良氏の領国のあり方を想像することはできない。しかしながら、例えばAには「城下の諸屋敷に名子・下人をおき、窓や藪を開いて店の様にして売物を出す」とあるが、これは前述した『結城氏新法度』第八一条の禁令と同じ内容なのである。

以上から、武士社会の底辺や「ラッパ・スッパ」の世界は商工業の世界と密接なつながりがあり、それゆえ時衆や「一向衆」とも関連があったと考えることができ、さらにその前身としては、商品経済との密接な関係の中で生活した技能者集団「山の民」が考えられよう。

## 7 祈禱師・山伏・行商人

第三五条「祝・山伏・物しりへ宿之事」において、相良氏は「祝・山伏・物しり」に「宿を貸す」のを禁じているが、これはあくまでも「他所より来り候ずる」ものを問題としており、逆に領内の「祝・山伏・物しり」は、既に一定の統制を加え「一向衆の基」とならない手立てを行っていたと見ることもでき、領国内には公認の集団がおり、その上で非公認の宗教者集団の領内立入りを「一向宗」を理由に禁止した可能性が強いのである。

第三七条「素人の祈念・医師之事」も「男女によらず、素人の祈念・医師取いたし、みな一向宗と心得べき事」と

あるが、これまた「素人でないプロの祈念・医師はよい」と解釈できないであろうか。例えば『歴代参考』<sup>⑧</sup>には、相良長毎は球磨川の源流、肥後と日向の国境、人吉盆地東方の多良木・湯前と日向の米良を結ぶ街道を見下す位置にある「市房山」を御神体として祭る修験系の「市房社」を再興したとあり、相良氏が領内の山伏たちに対し統制を行ったとの想像は当たっているように。少し長いが引用したい。

長每公御代永正三年丙寅年、市房社別当普門寺御建立、本尊六観音也、伝記二曰、市房社別当、昔ハ修験道湯山二有、今年岩野二里坊ヲ建、号施無畏山普門寺、黒肥地東光寺前住永尊ヲ以開山トス、今ノ生善院ノ地也、永正八辛未年、長每公市房社御再興、別当第二代盛呼也、当社ハ人皇五十一代平城天皇御宇、大同元丙戌年、日州諸県郡霧島勸請也、身体ハ地神四代彦火々出見尊、本院者六観世音寺也、此時ノ大檀主・別当不知、

一方エンブリーの『日本の村 須恵村』によれば、「球磨地方では祈禱師は祈りごとを職業としていたので、呪い師ともいわれ、小さな宮とか寺をお守りしているのが普通である。須恵村には三人の祈禱師がいる。……村で病人が出ると、本人か親類のもとが代りにすぐさま祈禱師のもとへいく。村人は祈禱師の治療に関する力を医師と同じくらい、あるいはそれ以上だと考えているし、それに治療代はずっと安くすむのである」とある。つまり、昭和初期の須恵村で第三七条の「素人の祈念・医師」や第三五条の「他方より来たり候する祝・山伏・物しり」と対応するものは、病氣治療を行う祈禱師となろう。

昭和初期の段階では、祈禱師は皆村に定着しており、「須恵村で圧倒的に人氣と勢力のあるのは、上手部落の天台宗の寺に住み、三宝荒神を祀る盲目の祈禱師で、次に有名なのは覚井の稲荷神社の神主、三番目のは北岳神社の神主

である」とある。しかしエンブリーの調査によれば、祈禱師になる契機は「夢の中で稲荷のお告げを聞く」ことにあつたのだから、誰でも「夢」さえ見れば祈禱師になれたはずで、「素人の祈念・医師」と「小さな宮とか寺をお守りしている」祈禱師とを原理的に区別することは困難であると思われる。

それにもかゝらず享保十年七月の相良氏禁制第四条<sup>1)</sup>には、我々が問題とする『相良氏法度』第三七条と同様、出家・杜人・山伏以外の祈誓の取次并禱呪を禁止しているのである。ところでエンブリーの「憑き物」の記述を読むと、「各部落には少なくとも一人の《犬神もち》といわれて、とかくの評判をもつ婦人がいる。必ずしも生れつきから病的なのではないが、とりつかれた人の意におかまいなく時として本人の意志から離れて魔道を働くのである。……一度犬神につかれたことが確かめられると、すぐさま祈禱師のもとにかけつけなければならない」とある。

つまり祈禱師に対する需要は、病氣の他この《犬神もち》と云われる憑き物とか、わりがあつたことがわかるのである。昭和初期の段階では、各部落に最低一人の《犬神もち》に対して、十八の部落からなる須恵村には盲僧や神主の祈禱師が三人いたが、我々が問題とする時代においては、相良氏はこの《犬神もち》に対して建前としては「素人の祈念・医師」や「一向衆」禁制を表向き掲げているが、実際には《犬神もち》信仰そのものに対する禁止・抑制を意図していたのであろう。

第三九条には「爰元外城におゐて……」とあるが、近世鹿児島藩の「外城」が鹿児島島の「内城」に対する外衛の支城を云い、中世以来の城砦を指すことから、この場合の「爰元」は球磨郡人吉城を、「外城」は今引用した『歴代参考』に登場した「湯山」や「岩野」など、各地の地頭居館の城砦を指すと理解してよいだろう。また『八代日記』天文十二年正月十九日の条には「八代七日市・九日市焼候」とあり、当時の八代の城下町が「七日市・九日市」など定期市から構成されていたことがわかる。

また「売買をいたし候上は」とあるが、相良領内の「市」で売買を行ったものには、農水産物や農具類など日用品を売りに出した農民などが一般に考えられるが、このほか特別な商品を商った商人としては、小は振り売りをして歩く「行商人」から大は海外貿易商が考えられる。さらに彼らが「誰々の被官」と称して「なしか」を納めないところから、今川領国内で友野座を率いた友野氏や会津の梁田氏のような「商人司」の下にいる行商人たちや、前章で考えた武家被官の商売などが考えられる。

ところで原口虎雄の研究によれば、近世薩摩藩の有力寺社の所領内の町場には「門前者」という特殊な身分の者たちによって構成された商業地域の「門前町」があったという。彼ら「門前者」は百姓・浦人・町人より下位で、苗代川者（朝鮮の役の俘囚で焼物を業とする）・穢多・慶賀（＝非人）より上位の身分であった。彼等は「寺付き下人」であり、また「寺院の私的保有地の百姓」でもあった。彼らは半農半漁の生活をしたものもあったが、大方は商業を営んでいたらしいと原口は想像している。

寺社の強い保護下にあったこの近世薩摩藩の「門前者」は、中世の中央の史料に登場する「神人・寄人」などとは同じものと考えることができよう。一方、神崎宣武は『盛り場の民俗史』<sup>51</sup>の中で、露店の常設店舗化という流れを指摘した上で、浅草の仲見世は、元禄のころ浅草寺の境内掃除の賦役を課せられた者が、その報酬として境内での仮設商いを認められたことに始まるとしている。それゆえ「門前者」は現代に残る露天商「テキヤ」ともよく似た存在と考えることができよう。

「風テンの寅さん」という映画は、妹の「さくら」、団子屋の「おじちゃん・おばちゃん」など変わらないメンバーに対して、寅さんの相手となるマドンナ役の女性が映画ごとに変わる約束で続いているシリーズものである。この映画は寅さんが葛飾・柴又の帝釈天の門前町の団子屋の二階での居候の生活と、露天商「テキヤ」としての旅の生活の

二つの場面を行き来することで構成されており、柴又の団子屋に居づらくなると、旅にでて行くというパターンの繰返しである。

この映画では寅さんが家を出て行くと、「テキヤ」の生活がごく自然に繰り返されるのだが、神埼の言う露店の常設店舗化の流れを前提とすると、門前町の団子屋が今では立派な常設店舗であるとしても、もともとは薩摩の「門前者」と同様、柴又の帝釈天の保護下で「お土産」や団子を商う露天商で、さらにその前史は旅から旅の生活であったという事実がここには隠されているのであろう。つまり寅さんは門前の団子屋の前史を再現しているのである。

ともあれ、この第三九条が前提としている行商人とは、現在も残る露天商の「ヤシ・テキヤ」と同じと考えられよう。神崎は江戸中期以降ヤシの組織化が進むと、各地のテキヤの有力親分筋が今に伝える家宝の『十三香具虎之巻』が作られるに至るが、これには「①一年に一度は親分方へ立ち寄ること、②規定に背いた者とは仲間付き会いをしないこと、③旅先で病気の者があれば朋友が集まって介抱すること」など現在のテキヤの一家組織に伝えられている取り決めと同じことが記されているとしている。

ここでいう「ヤシ・テキヤ」の親分というのが、前述した今川領国内で友野座を率いた友野氏や会津の梁田氏のよいうな「商人司」と考えてよいであろう。このような想像が許されるなら、彼ら行商人たちは一方では寺社の強い保護下に置かれながら、他面「商人司」の支配下にあつた存在ということになる。ここから、相良氏領内にはもともと「商人司」その「被官」である行商人」という武装した自治集団が業種に応じていくつも存在していたことになる。

なお神崎は『守貞漫稿』に「矢師は仮名にて本字野士也。字の如く野武士等飢渴を凌ぐ便りに売薬せしを始めとす」とあることを紹介した上で、「ヤシは薬師でもよい。もちろん、香具師でもかまわない……それが売薬に関連した表記であることが大事なのである。……生薬や香の類が、かつての露天商人の主流商品であつた」と述べている。こ

で私は、前述したとおり第三六条の「祈念・医師」が「薬売り」であった可能性に強く引かれるのである。

またここには「別当」が登場するが、これは勝俣の言うように「町・港湾・市場などの管理責任者」であろう。この「別当」が、近世の薩摩藩の「外城」町における郷士の「部当」と同じものであると仮定すれば、「別当」は武士の一員となるが、他方、先に引用した『歴代参考』の「市房社別当」などと同じく、宗教者の山伏である可能性もある。後者の考えに立てば、「他領よりやってきた山伏」は領内から排除するが、相良領内の山伏は商人等を統制する「別当」として相良氏権力の一翼を担うものに編成されていたことになる。

ともあれ相良氏は「別当」を通じて「市」を統制し、「市」で売買を行う一般領民や行商人たちから、市場税・商業税である「なしか」を徴収しようとしていたのであり、一方行商人たちは、武力を持つ商人司のもとで属人法主義的な支配と保護を受けており、その関係をしてこに別当支配に対抗したとなろう。以上から、近世の薩摩藩の「部当」と戦国相良氏の「別当」とは別のもので、後者は山伏を指し、前者はその山伏の仕事を郷士たちが奪って、二次的に成立した役職と考えたい。

なぜなら、桜井英治が明らかにしたように<sup>33</sup>、中世商業の慣例として「市」で売買を行う行商人たちは「市祭」に参加する義務があり、「市祭」に参加して初めて市で売買する権利「市座」をあたえられていたのであり、他方、山伏は「市立」の際の市祭に「祭文」を読んでいたと考えられる。相良氏により「別当」に任命された山伏が、人吉その他の城下町である「爰元外城町」の「市」を統制し、一般領民や行商人たちから市場税・商業税の「なしか」を徴収することはいかにもありそうなことだからである。

ここに「先代のごとく」とあるのは、「市祭」の際に市場税・商業税である「なしか」を昔から納めていたことをこのように表現したと理解してよいであろう。つまり相良氏は、中世商業の慣例としての「市祭」のあり方を踏ま



えて、山伏Ⅱ「別当」を相良氏側の商人統制の担い手に設定し、これまで「商人司」「行商人」というルートで捕まえられていた行商人たちを「別当」を軸に再編成し、領内の流通経済を掌握すると共に、流通の拠点として外城町などの城下町形成を試みていたとなろう。

それゆえ第三九条の「付」を除く本文は「相良氏のお膝下である球磨郡人吉城や地頭の居館である〈外城〉町においては、今後たとえどのような人の被官であっても、〈売買をいたし候上は〉別当へ商業税・市場税である〈なしか〉を収めるべきである」となろう。

## 注

- (1) 本稿は本誌前号に掲載した「相良氏法度の研究」<sup>1)</sup>の続編に当るものであるが、前号で述べた《長海法》第一〇条の「刈跡放牧」については、本稿の考察に改めることとし、また各条令の事書についても、佐藤進一他編の『中世法制史料集第三卷』(岩波書店 一九六五年)を本に、考え直すところがあった。
- (2) 洪沢敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編 平凡社 一九八四年
- (3) 『日本領主制成立史の研究』岩波書店 一九六七年 一八三頁
- (4) 『日本封建制成立史論』東京大学出版会 一九七一年 三八八頁
- (5) 森田誠一「熊本県の歴史」山川出版社 一九七二年 一七五頁
- (6) 『中世政治社会思想 上』日本思想大系 21 岩波書店 一九七二年の頭注による。
- (7) 『聞き書・熊本 of 食事』(農文協 一九八七年)によれば「栗はゆがいたり勝ち栗にして食べる」とあり、その他「(いちいがし)の実から作った『いちごんにゃく』は主食がわりにして食べる」とある。
- (8) 『中世政治社会思想 上』四四九頁の補注
- (9) 「戦国相良氏の三郡支配」『史学雑誌』第86編第9号 一五頁第二章の注(5)参照。
- (10) 拙校「人身売買文書《てんかう》文言の研究」弘前大学教養部『文化紀要』第30号 一九八九年 参照。

- (11) 『折口信夫全集 第三卷』中央公論社 一九五五年 所収  
 (12) 藤木久志著  
 (13) 「忍術」の項、中林信二著  
 (14) 『古事類苑 兵事部八』吉川弘文館 一九七四年「間諜」の項。  
 (15) 永原慶二『小学館 日本の歴史 14 戦国の動乱』一九七五年 二百頁「特殊兵力」  
 (16) 前注(5)参照。  
 (17) 「下人の隷属の二段階」前掲書「前注(3)参照」所収 三九二頁。  
 (18) 一九九四年度歴史学研究会大会 全体会報告 一九九二、五、二八  
 (19) 佐藤進一他編『中世法制史料集 第一巻』岩波書店 一九五五年  
 (20) 平凡社 一九八九年 二八〇頁  
 (21) 一九九四年度歴史学研究会大会 全体会報告 一九九二、五、二八  
 (22) 熊本中世史研究会編 青潮社 一九八〇年。  
 (23) 『折口信夫全集 第十七巻』中央公論社 一九五六年 所収  
 (24) 『蒙古襲来』小学館「日本の歴史 第一〇巻」一九七四年 二八〇頁。  
 (25) 東京大学出版会 一九八三年  
 (26) 「初期中世武士の職能と諸役」『初期中世社会史の研究』東京大学出版会 一九九二年 所版 一五一頁。  
 (27) 『中世の武士と文士』東京大学出版会  
 (28) 『下人論』日本エディタースクール出版部 一九八七年 一五四頁。  
 (29) 平凡社選書 一九九一年  
 (30) 『歴史学研究』No五七四号 一九八七、一一  
 (31) 『中世・内乱史研究』No15 一九九四、五  
 (32) 『ことばの文化史・中世1』平凡社 一九八八年  
 (33) 「いわゆる《身分法令》と《一季居》禁令」『日本近世国家史の研究』岩波書店 一九九〇年  
 (34) 『山の民・川の民——日本中世の生活と信仰』平凡選書 一九八二年

- (35) 岩波講座『日本通史第一巻 日本列島と人類社会』一九九三年 所収
- (36) 『日本民衆史2 山に生きる人々』未來社 一九六四年 所収
- (37) 相良家近世文書二〇〇号『熊本県史料集成』十四卷 一六〇頁。
- (38) 米村竜治『殉教と民衆』同朋舎 一九七九年
- (39) 谷川健一編『日本俗文化資料集成 第二巻 山の民俗誌』三一書房 一九九一年 所収 底本は、日本経済評論社 一九七八年。
- (40) 秀村選三編『薩摩藩の基礎構造』御茶の水書房 一九七〇年 所収
- (41) 新行紀一『一向一揆の基礎構造』吉川弘文館 一九七五年によれば、三河一揆の理解が次第に家康家臣団の分裂した戦いという方向に矮小化されてゆくの、一揆構成員となった家康家臣のみが強調されて行くが、『松平記』『家忠日記増補』と異なり『三河物語』では一揆参加者名を記した後、『小侍』についての多くの記述があるとある(二八七頁)。当面の我々の関心に照らして考えれば、『数ヲシラズ・サイゲン無』とあるこの『小侍』にこそ注目すべきであろう。
- (42) 『徳川実紀』「元和四年一月二十日の条」。高木昭作は「この記事を含む『元和年禄』は問題の多い編纂物であるが、この記事の場合は別の史料によって確認されることから信用してよい」としている。前掲書二七〇頁。
- (43) 『日本列島の新たな実像を求めて』(『海と列島文化』完結記念シンポジウム『日本像を問い直す』小学館 一九九三年) 中央公論社 一九六五年 七七頁。
- (44) 『豊田武著作集第三巻 中世の商人と交通』吉川弘文館 一九八三年一四九頁
- (45) 小学館 一九七四年 一二五頁。
- (46) 高木昭作・前掲書二八〇頁。
- (47) 前注(40)参照。
- (48) 『八代日記』(「前注(22)参照」に収録。
- (49) 諸法令留帳『熊本県史料集成』十四巻 一七五頁。
- (50) 岩波新書 一九九三年
- (51) 桜井英治「中世商人の近世化と都市」(「高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅲ 人』東京大学出版会 一九九〇年」
- (52) 「市の伝説と経済」(「五味文彦編『都市の中世』吉川弘文館 一九九二年」
- (53)